Osaka University Knowledge Archive

Title	経済人類学における「交換の枠組み」概念
Author(s)	中川, 理
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2006, 32, p. 75-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3869
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

経済人類学における「交換の枠組み」概念

中　川　　理

目　次

1. はじめに
2. お金の決定論
3. お金の決定論への批判
4. 社会的枠組み論の不十分さ
5. 枠組みとあふれ込み
6. 結論

大阪大学大学院人間科学研究科紀要 32：75-92（2006）

経済人類学における「交換の枠組み」概念

中川　　理

1. はじめに

この論文で筆者は、1980 年代以降の交換についての人類学的研究をレヴューし、どのようなアプローチによって交換をよりよく記述できるかを検討する。[1] 本論ではとりわけ、行為者自身が交換する実践をどのように理解しているかという問題に対し、「枠組み」の概念を用いて取り組む研究に注目し、その可能性について考察する。

1980 年代以降、お金を用いた交換の導入によって従来の社会関係が破壊されてしまうとする「お金の決定論」に対する批判が、人類学および社会学において行われるようになった。PARRY と BLOCH (1989) や ZELIZER (1989, 1994) は実証的研究によって、じっさいには事態は逆であり、交換を行なう社会関係の枠組みによってお金の意味が決まると主張した。これらの議論は有用であるが、行為の意味を定める「枠組み」をあまりに静態的にとらえてしまっている。本論ではこの問題点を検討し、それを克服する方法を模索する。そのために、枠組み生成のダイナミックな過程に注目する WEBER (2000) や CALLON (1998a, 1998b) のアプローチを検討し、それらが交換の民族誌に可能性を開くものであると論じる。

2. お金の決定論

2.1 お金の決定論とは何か？

お金の決定論とは、貨幣が社会のなかに入ってくると、人間関係が破壊されてしまうという考え方である。この考え方は、長年共有されてきた。SIMMEL (ジンメル 1999(1900)) などの影響力のある思想家たちの議論の前提ともなっている。

人類学においても、お金が社会関係を破壊するという考えは継承されてきた。BOHANNAN によるティヴ社会の事例がもっともよく知られている (BOHANNAN 1959)。BOHANNAN によると、西洋の貨幣が導入される以前、ティヴ経済は三つの交

換領域 (Sphere of Exchange) に分かれていた。日常的な食料などが交換する領域、威信財が交換される領域、そして女性が交換される領域である。これら三つの領域は独立していて、領域を横断して交換を行なうのは非常に困難であった。しかし、西洋の貨幣が導入された結果、これら三つの領域のあいだの隔壁が崩れてしまった。すべてがお金と交換できるようになり、結果としてすべてとすべてが交換できるようになってしまった。このストーリーが表現しているのは、まさしく SIMMEL が強調したような「お金の決定論」である。

ZELISER は、BOHANNAN が展開しているような貨幣についての思考が広く見られると示し、その共通項を以下の 5 点にまとめている。

（1）貨幣の機能と性格は完全に経済的なタームによって定義される。SIMMEL の言うように、「（貨幣は）経済価値というコンセプトの具現であり、そのもっとも純粋な表現である」(SIMMEL 1978(1900):101, ZELISER 1989:346 に引用)。（2）現代社会では、すべてのタイプの貨幣は同じであるとみなされる。すべての貨幣は市場で用いられる貨幣と同質であるとされる。（3）貨幣と非金銭的な諸価値のあいだにするどい二分法が持ち込まれる。完全に経済的利害に関係している貨幣に対して、貨幣が入り込まない社会関係の価値は交換できない特別なものとされる。（4）金銭的な利害はつねに拡大しており、生活のすべての領域を侵そうとしていると見られる。交換の媒介として、貨幣はさまざまな財やサービスを市場の網の目へと引き込む力を持っている。（5）非金銭的な諸価値は貨幣が入り込むと変化してしまう、という考えが当然のものとみなされている。その逆、すなわち非金銭的な諸価値が貨幣を変化させるという可能性は、考えられていないか明確に否定される (ZELISER 1989:349-350)。

ZELISER のまとめが指し示すイメージは明確である。比喩的に言うならば、次のようになるだろう。共同体の外側からのっぺらぼうのお化け（お金）がやってきて、共同体のメンバーを飲みこんでいく。お化けに飲み込まれると、みんなのっぺらぼうになってしまう。かつて共同体の中にあった美しい関係はすべて失われ、のっぺらぼうのあいだののっぺらぼうな関係に取って代わられる……。のっぺらぼうの世界を肯定するにせよ否定するにせよ、宿命論であるという点では多くの考えは共通している。

このように、お金の決定論は従来支配的な考え方であったと言える。しかし、この考え方は、交換の社会的枠組みに注目する実証的研究によって、問題視され否定されるようになった。

3. お金の決定論への批判

3.1 社会的枠組みへの注目

1980 年代から、お金の決定論を実証的研究によって問い直そうとする動きが盛んになった。人類学では PARRY と BLOCH による論集が、社会学では ZELISER の研究が代表的である (BLOCH and PARRY 1989, ZELISER 1989, 1994)。これらの研究が導く結論には共通性がある。つまり、じっさいは「(お金の決定論が想定するように) お金が社会関係を決定するのではなくて、その逆である。すなわち、社会関係がお金の意味を決定するのである」という主張を行っている。

PARRY と BLOCH の編集した論文集 (PARRY and BLOCH 1989) では、外の世界で稼いできたお金が共同体内部に取り込まれると贈り物となる、非西洋諸社会において諸事例を紹介している。BLOCH と PARRY によると、お金が「伝統的」社会のモラル・エコノミーを破壊するという議論は妥当ではない。事態はむしろ逆である。「お金が特定の世界観を惹き起こすのではなくて、われわれが強調したいのは、いかにして既存の世界観がお金を表象する特定のやり方を惹き起こすかである」(19)。簡単に言うと、新しく社会の中に入ってきたお金 (国家の発行する通貨) は、すでにある社会関係についての理解に基づいて理解されるのである。お金の象徴的意味がどのようになるかはコンテクストに依存しているので、「お金の決定論」を普遍化できない。この論文集のあつかう諸社会では、特定の文脈においてはお金は破壊的な力を持つものとしてでなく、むしろ社会関係の再生産に役立つ「よい」ものとして表象されている。

彼らは、お金のシンボリズムはたんに社会によって違うと述べているのではない。それだけでなく、それぞれの社会の「なかに」二つの相反するお金の表象が存在していることが重要であると考える。民族誌的研究から分かるのは、それぞれの社会にはふたつの異なった交換の領域があることである。すなわち、「一方に社会的宇宙的な秩序の長期的な再生産にかかわる取り引きがあり、もう一方に個人的な競争のアリーナに関係する短期的な取り引きの『領域』がある」(24)。短期的な市場の取り引きは、個人主義的で競争的である。しかし、このような短期的な取り引きによって得られた (お金を含む) 財は、長期的な社会秩序の再生産に使うために「変換される(converted)」。非人格的な取り引きによって得られたお金は、(多くの場合儀礼的プロセスを経て) 人格的な社会関係の維持のための交換に転用されるのである。彼らは、このようなふたつの交換領域の関係を一般的なパターンとして提出している。

例えば、同論集に所収されている TORREN の「お金を飲む」と題された論文は、フィ

ジーの事例を分析している (TORREN 1989)。グル・セデという集まりで、参加者たちは地域のラグビーチームの遠征費といった公共の活動のお金を集めるために、ヤコナという土地独特の飲み物を「売る」。しかし、そこで行われている行為は、彼らにとってはヤコナの売り買いとしては理解されていない（商売はフィジー人にとって「ヨーロッパ人のやり方」を象徴しており、「われわれ」のあいだには持ち込まれてはならないと考えられている）。そうではなくて、参加者たちはこのやり取りを親族のあいだの贈与として捉えているのである。[2] このようにして商売によって得られたお金はグル・セデの儀礼的交換によって集められ、集団のために用いられる。お金はこの過程で「浄化 (purification)」されるのである。各社会にふたつの交換圏が存在していると考えるこのモデルは、現在も強い影響力を持っている。例えば野元によるカメルーンのトンチン（頼母子講）についての分析でも、図式は踏襲されている (野元 2004)。

一方、ZELISER は 19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカ家庭におけるお金の意味づけについて研究し、BLOCH と PARRY とよく似た結論に達している。つまり、お金の意味づけは家庭のなかに入るとともに変わることのである。この時期、アメリカの上・中流家庭において、多くの場合家庭の収入源は夫の給料のみであった。上・中流階級では家庭の財布は妻ではなく夫が握っていたので[3]、妻は夫からの給付 (allocation) によって家計をやりくりする必要があった。夫から妻への給付は、必要なときに夫に頼んでもらうお金 (dole) で行われ、より後には月ぎめの手当て (allowance) のかたちで行われるようになった。このため、妻たちはお金を持たず、貧しい状況に陥ることがしばしばあった。結果として、妻の夫に対するお金の要求は夫婦間の争いのたねになり、場合によっては妻は夫の財布からお金をくすねることもあった。このように、19 世紀末から 20 世紀はじめのアメリカでは、給付と要求によってお金のやり取りがなされていた。つまり、「いったんお金が世帯のなかに入ると、その給付や計算や使用は、市場のルールからはかけ離れた家庭内のルールに従っていたのである」(ZELISER 1989:367)。

BLOCH と PARRY の論集と異なり、必ずしもお金は「よい」ものとして表象されているわけではない。しかし、彼らの議論と同様に ZELISER は、お金の意味づけは家庭の内と外のふたつの領域において異なっていて、家庭のなかではお金は独自の贈与の論理にしたがってやり取りされていると主張している。

以上の研究は、「お金の決定論」に対する有効な実証的批判を提供している。あらためてまとめておこう。お金に社会関係を変化させる内在的な力があるわけではない、お金がやり取りされる領域によって意味づけが変わるのである。共同体や家庭の領域に入ったお金は、別の論理にしたがって交換され、別の意味づけがなされる。

3.2 言語ゲームとしての社会的枠組み

しかし、この「領域」と呼ばれるものは正確にはなんなのだろうか？中川敏は、「領域」が変わるとはどのような現象であるか、言語に注目した視点から明確にしている（中川 1992、2004)。彼によると、お金の意味づけの変化は、とりもなおさず相互行為を枠づけるゲームの変更であり、それにともなうイディオムの変更として理解できる。

彼が扱うインドネシアのエンデ社会では、威信経済と市場経済の領域が分かれている。威信経済とは、婚資のやり取りであり、エンデ社会では婚資は親族関係の複雑な規則に従ってやり取りされる。その一方で市場経済がある。これは端的に商品が売り買いされる領域である。

中川敏は、このふたつの領域は独自のイディオムからなるゲームであると捉える。つまり、市場経済は「売る」(teka)、「買う」(mbeta)、「取り替える」(nggerhu)、「助ける」(rhaka)、などのイディオムによって表現される活動が行われる領域であり、威信経済は「妻を与える者たち（カッエ・ウンブ)」と「妻を受け取る者たち（ウェア・タネ)」のあいだで「与え（パティ)」、「受け取る（シモ)」といったイディオムで表現される活動が行われる領域である。そして、これが重要な点であるが、まったく同じように見える現象がどちらのイディオムを用いて描写されるかによってまったく意味づけを変えてしまう。威信交換の規則ではそれをすると他の親族集団のなかにとりこまれてしまうという重要な帰結をもたらす財のやり取りも、市場交換として意味づけられればたんなる「借り」となって借りを返せばそれでおしまい、というケースがあるのだ。「現象としては、婚資交換すなわち威信経済の中のように見える出来事、<<ンガウの移動>>も、それが「援助」として、すなわち市場交換として記述されさえすればそれは市場交換なのである」(中川 2004:38)。このように、「領域」とは言語ゲームであり、「領域」を変更するとは言語ゲームを切り替えて行為の記述の仕方を変えることに他ならない。

この切り替えは、BLOCH と PARRY が扱ったようなお金の意味づけの変換の事例でも妥当する。エンデの人々がお金を稼ぐために行く出稼ぎ先ではお金は市場経済のイディオムで語られるが、出稼ぎで稼いだお金がエンデに送られるとお金は威信経済のイディオムで語られるようになるのである。出稼ぎ先の仕事場には、「たくさんの知り合いがいる。なかにはカッエ・ウンブ（嫁を与える者たち）もまた、ウェア・タネ（嫁を受け取る者たち）もいる。しかし、『もうそんなことはかまわない』とハニは言う。彼らは非・親族、非・贈与の非・場所に入ったのだ。」(中川 2004:48)。出稼ぎ者たちはもはや威信経済のイディオムで関係を捉えず、市場経済の非・関係性に身を投じている。しかし、出稼ぎで得られたお金は再び威信経済のなかに導入される。「けっきょく、ハニ

がマレーシアという非・場所、非・贈与（市場経済）の領域で稼いだすべての金が、贈与として（威信経済の領域で）使用されたのである」(49)。

以上のように、中川敏は、お金の意味づけの問題を明確に言語ゲームの選択の問題として再定義している。「領域」とは行為を記述する枠組みであり、市場経済での「非・親族、非・贈与の非・場所」のイディオムによる記述から威信経済での親族イディオムによる記述への変更が、BLOCH と PARRY がお金の意味づけの変更として捉えている事態である。

3.3 社会的枠組みという捉え方

以上で分かったことはなにか？整理しておこう。まず第一に、お金が社会関係を決定するのではなくて、社会関係の規定がお金の意味づけを決定する。端的に言えば、市場の領域ではお金は関係性を作り出さないやり取りの媒体であり、共同体の領域ではお金は関係性にしたがうやり取りの媒体となる。第二に、社会関係の規定とは、行為者による言語ゲームの選択である。どのようなイディオムでやり取りを捉えるかによって、やり取りの意味づけは変わる。

この主張は、お金の決定論の普遍的妥当性に対する有効な反証になっている。人びとはあらゆるところでのっぺらぼうのお化けに飲み込まれたりしていない。「外の世界」ではのっぺらぼうかもしれないが、「中の世界」ではのっぺらぼうの仮面を脱いで顔を出す。これがこの議論の提出するイメージである。

4. 社会的枠組み論の不十分さ

4.1 枠組みという捉え方の問題点

決定論に対する批判は、非常に有用であったし、またあり続けている。お金や商品に内在する本質が社会の性質を決めてしまうというなんとなく説得力のある議論を、詳細な民族誌的理解によって覆すことに成功した。しかし、この議論にはある欠陥がある。それは、枠組みをつねにすでにそこに出来上がっている所与のものとみなしてしまい、枠組みが作り出されていくプロセスについての考察を欠いているという点である。ふたつの点が問題として挙げられる。

第一に、社会的枠組みによる意味づけを自明で共有されたものとみなしている。上に見たように、言語ゲームとしての枠組みの切り替えによって、お金の意味づけが変わるというのが「枠組み理論」の特徴であった。ここでは、スイッチの切り替えのように枠

組みが切り替わることで意味づけがころころと変わるかのように扱われていた。例えば、象牙を渡す行為が「受け取った」と記述されるとのっぴきならない関係で与えてと受け取り手は結び付けられてしまうのだが、「この同じ現象が市場経済のイディオムで記述されれば、起こっていることは「あなたが私に一本の象牙を借りている」、それだけのことなのである」(中川 2004:38)。記述の切り替えによってものの見え方 (ゲーム) は切り替え可能であり、ゲームさえ同定されればその規則はすべての参加者にとって自明であるかのようである。しかし、枠組みはただ選択すればよいだけのみんなに自明なものなのだろうか？

第二に、共同体外部の市場経済において人が匿名の利益を計算する人間であることが自明視されている。MILLER が指摘するとおり、BLOCH と PARRY に代表されるような観点は、お金を「飼いならす」土着の意味づけに注目している (MILLER 1995)。そのため、親族や家庭の内部でのお金のやり取りについて詳細な記述を行ってきた。それに対して、共同体外部での「飼いならされていない野生の」お金の意味づけについては、問いが欠落しているか、あるいは非・関係としての市場経済という従来の考えがそのまま受け入れられるかして来た。しかし、市場における非・関係性はそれほど自明なものだろうか？

これらの問いに対して、近年の研究は、より生成のプロセスに注目して枠組みを捉えるべきであることを明らかにしている。それらの研究の特徴は次の二点である。第一に、社会的枠組みは、おのずとそこにあるものではなく、あえて作り出そうという仕事がなされることによってようやく作り出され、維持されるものである。市場経済における枠組み(すなわち社会関係の不在、あるいは非・関係性）も、何もしないでも与えられているものではない。そうではなくて、積極的に作り出されなくてはならないものである。言い換えれば、計算する個人が成立するような状況は、積極的に作り出されなくてはならない。第二に、作り出される枠組みは、つねに枠組みの外に排除したはずの要素によって侵入される可能性を持っている。したがって、枠組みはもろいものである。しかし同時に、「枠組み化(framing)」と「あふれ出し(overflowing)」のプロセスによって、枠組みは絶えず更新されていくものである。

以下で、これら生成に注目した研究を検討していく。その結果として、これらの研究が枠組み理論を補完し、より綿密な分析を可能にする観点であることが明らかになる。

5. 枠組みとあふれ出し

5.1 枠組み、あふれ出し、もろさ

枠組みの生成的側面に光を当てた研究は、枠組みが自明な言語ゲームからは程遠く、枠組みを作り出す相互行為によって生み出されていくものである点を明らかにしている。また、生み出される枠組みはつねにその外側に排除されたはずの要素に侵入される可能性をはらんでいる「もろい」ものであると教えてくれる。

このことは、贈与交換と商品交換についてともに言える。まず贈与交換についてのBOURDIEU の議論について述べ、その後で WEBER や CALLON などによる商品交換についての議論を紹介する。

5.2 純粋な贈与はどのように作られるか

BOURDIEU は、贈与についてのふたつの極端に対立した見方を解消するための説明を行っている (ブルデュ 1988、 BOURDIEU 1997)。ふたつの対立した見方とは、次の二つである。（1）贈与における利害関心のなさ (disinterestedness) は本心からのものであり、結果としての互酬性は個人のレベルを超越している。（2）利害関心のなさは見せかけのものであり、じっさいは計算 (calculativeness) にもとづいている。両者の見方に対して、BOURDIEU は、時間に注目して見事な分析を行っている。彼によると、重要なのは贈与と対抗贈与のあいだの時間のへだたりである。時間のへだたりが長くなると、先行する贈与は忘れられ、対抗贈与は計算された返礼としてではなく、新しい自発的贈与としてみなされるようになる。逆に、時間のへだたりが短いと、対抗贈与は計算された取り引きを行ったと思われてしまう。このように、時間的へだたりを作ることで、主観的な気前のよさと客観的な均衡の成立のあいだの矛盾は覆い隠される、とBOURDIEU は分析している。

表現を変えれば、贈与を自発的とみなすかどうかは、「時間枠組み (time frame)」4) をどの幅に設定するかにかかっている。つまり、次のような状況である。A さんと B さんがいて、B さんは A さんから過去に何かをもらったとしよう。いま、B さんは A さんに何かをあげようとしている。そのとき、「彼には 1 ヶ月前(あるいは 1 年前、10 年前)に何々をもらった。だから同じ価値のものを返さなくてはならない」とするならば先行する A さんの贈与は「時間枠組み」のなかに入っており、B さんの贈与は先行する行為に対する計算された行為となる。それに対して、B さんがただたんに「A さんに何かあげよう」とするだけならば、先行する A さんの贈与は「時間枠組み」の外に

あり、B さんの行為は自発的行為となる。

このように、どの行為を描写の枠組み内に入れ、何を入れないかによって、贈与の意味づけは変わってくる。そして BOURDIEU によると、タイムスパンの十分な長さが、冷酷な観察者からは対抗贈与であるように見える行為を、自発的で利害関心のない行為として描写することを可能にしているのである。

要点は、利害関心のなさは枠組み化によって作り出されなくてはならない、という点である。そして、同様に、純粋な利害関心も積極的に作り出されなくてはならない。

5.3 商業的枠組みの生成とそのもろさ

抽象的な市場（しじょう）ではなくて具体的な市場（いちば）における商業的やり取り (transaction marchande) を民族誌的に理解しようとする諸研究によると、人間関係をまったく捨象したその場で完結する商業的なやり取りは、おのずとそこにあるのではなくて、儀礼的に作り出され、舞台の上で上演される必要がある。

GARCIA による、フランスのあるイチゴ市場についての研究は、市場でのやり取りが「合理的に」遂行できるように売り手と買い手が個人的に会わず、電子化されたパネルを通して取り引きする仕組みが作り出された様子を描きだしている (GARCIA 1986)。この仕組みの導入以前は、イチゴ生産者は仲買人との個人的関係に頼って販売をしていていた。つまり、生産者は販売価格を仲買人任せにする代わり、お金の前借をしたり他の生産物を買ってもらったりする関係があった。このような状態であった市場に、既存の力関係を脱して競争原理を持ち込もうとする人たちによって作り出されたのが、パネル式の市場である。生産者（売り手）と仲買人（買い手）のあいだの依存関係を解消することに利害を見出した人たちが、数字だけが計算に入れられ個人的関係が介入できない装置を作り出したのである。

ここでは、社会関係が介在できないような「枠組み」が積極的に作り出されたことによって、初めてホモ・エコノミクスが可能になっている。

WEBER はこの点を敷衍して、枠組み (frame) を設定して、その内部では参加者が「個人的要素の一切を脇によけておき、中和し、廃止し、カッコに入れておく」(WEBER 2000:98) ことによって初めてその場で完結する商業的なやり取りは可能になるとしている。ホモ・エコノミクスは、したがって純粋に商業的な関係は「もとからそこにあるもの」ではなくて「作り出されていくもの」なのである。

WEBER は、このような「社会関係のカッコ入れ」のためにさまざまな手段がとられるとしている。つまり、「通常の出会いの場から遠くへと移動する、専門家の立ち会う

閉ざされた空間の中で会う、前もって確立されたかたちで契約を行い公式のものとする、などはいずれも商取り引きの世界と個人的なやり取りのあいだの関係のあいだの断絶を保証する儀礼的技術なのである」(WEBER 2000:98)。これらの「儀礼的技術」が、商業的取り引きという枠組みを作り出している。あるいは、プロヴァンス地方の市場を研究したLA PRADELLEの言い方にしたがえば、商業的な取り引きは「舞台の上で上演(mise en scene)」されるのである (LA PRADELLE 1996)。

これらの点に注目すると、枠組みはつねにすでに存在しているのではなくて、枠組み作りのプロセスによって作り出されていることが分かる。先ほどの純粋贈与を作り出すための「時間枠組み」、完璧な市場を作り出すための「枠組み」は、その範例となる事例である。物質的そして儀礼的な「枠組み」を設置するために必要な「仕事」を行うことではじめて純粋に商業的なやり取りが可能になるのである。

しかし同時に、容易に想像のつくように、このようにして作られる「枠組み」はもろいものである。つまり、排除されているはずの要素はすぐにやり取りの中に入り込んでくるのである。WEBERは、商業的取り引きの民族誌的記述はどのような要素がどのようにして商業的取り引きの枠組みに入り込むか注意して記述しなくてはならないとしている。彼女は、商取り引きの場面における「社会関係のカッコ入れ」について述べた後で、次のような点に注意を向ける。「しかしながら、すべての場合において商業的取り引きの分析を個人的関係から分離してしまえるだろうか？どのような場合に、パートナー間の関係性の歴史が取り引きの確立あるいは解消、または金銭的対価の額の決定、交換される財の性質において役割を演じるだろう？逆に、どのような場合取り引きはすべての個人間の関係による意味づけから逃れているだろうか？」(WEBER 2000:98)。注目すべきは、「枠組み」の外部の関係性の商業的取り引きへのあらわれなのである。

じっさい、商業的取り引きのなかにさまざまな関係が顔を出すのは当たり前のことである。例えば常連に対して「こないだいっぱい買ってくれたから、今日はおまけしとくわ」という商店主は、その場で終わる取り引きではなく過去の関係を枠組みに入れている。あるいは「こないだ一緒にサッカーをしたときいいパスを出してくれたから」おまけすることだってありえる。この場合は別のタイプの社会関係が枠組みのなかに持ち込まれている。このように商業的取り引きの記述枠組みにさまざまな関係性が持ち込まれる可能性がある。WEBERの試みは、どのような関係性が商業的取り引きの理解（すなわち描写）に持ち込まれるかを描き出そうとするものである。

5.4 「枠組み化(framing)」と「あふれ出し(overflowing)」：CALLON の議論

このように、商業的な関係（これは一種の非・関係である）を設定する枠組みはそれほど確固たるものではない。それは常に枠組みから排除したはずの社会関係によって侵食される可能性を持っている。CALLON は、このような「もろさ」を考慮に入れ、純粋な利害の計算が成り立つ市場の枠組みがそこに「あふれ出して」くる関係性を取り込みながら生成していく様子をモデル化している。彼によると、市場のやり取りは「枠組み化(framing)」と「あふれ出し(overflowing)」が相互におこるプロセスとして捉えうる(CALLON 1998a, 1998b)。つまり、経済活動において起こっているのは、人間関係を排した経済的「枠組み」が設定されるが、排除したはずのものが枠組みのなかに「あふれ出し(overflow)」、さらにそれらの要素を計算に入れた「枠組み」が設定されるというスパイラル状のプロセスなのである。

CALLON は、この概念を説明するのに、HOYLE による臓器移植についての興味深い例を引き合いに出している。臓器移植の希望増加にともない、臓器の性質（死亡状況、医療履歴、家族的コンテクスト）を標準化されたリストにしたファイルが企画された。こうすることで、臓器がなかば商品 (half-good) として、より条件にあった臓器を望むすべての患者に対して提供可能な物になるよう意図されていた。ところがリスト作成のために家族や友人、そして臨終に立ち会った医者に面会するうち、リスト作成者は逆に臓器提供者の人生の困難（ドラッグやアル中、性生活）を含んだ伝記から離れられなくなってしまった (HOYLE 1994、CALLON 1998a にのまとめよる)。物を関係から切り離そうとすればするほど逆に関係を作り出してしまうというダイナミクスは「枠組み設定プロセスの核心に刻み込まれており、その明らかな帰結である」(CALLON 1998:37) と CALLON は述べている。この観点からは、「経済の離床」はいったん達成されれば簡単に維持していくことのできるものではない。関係性を排除する経済的枠組みは、つねに失効の危険にさらされている。逆の観点から言うならば、非経済的な関係性は商業的やり取りのなかにあらわれる可能性をつねに持っている。

しかし同時に、現代の市場経済においては、これらの経済外的な関係性を計算の枠組みに取り込んでいこうとするプロセスがあると CALLON は言う (CALLON 1998b)。経済活動が外側の世界に与える影響の問題は、経済学で「外部性(externality)」という言葉で表現されてきた。例えば、アルミ工場から発せられる煙が周りの家畜や農民に対して健康被害を与えているような場合を考えてみよう。このような影響が経済活動のなかで考慮されない場合、つまり排出が規制されず、被害に対する補償責任を企業が負わないような場合、この要素は利害の計算の中に組み入れられない。この時、アルミ工場

の経営者はこれらの要素を考慮から完全に外して利潤追求を行うことができる。

しかし、健康被害を押さえるために煙の排出量を考慮に入れなくてはならなくなると、事情は変わる。これまでの計算は通用しなくなり、農民に対する配慮をしなくてはならなくなる。こうして外部性が「あふれ出す」ことによって、経済行為の枠組みがかく乱されてしまう。

だが、これらの外部性は、すぐに枠組みの内側に取り込まれる。つまり、煙の排出による健康被害は、それを考慮に入れた上で利潤を最大化しようとする新しい計算の要素となる。煙の排出量を規制以下に押さえた上でもっとも効率的に生産を行うためにはどうしたらよいかについて、新しい式が立てられる。こうして、外的なかく乱要素はたんなる一変数となり、あらためて純粋な経済活動を行うための枠組みが確立される。これが、経済における「枠組み作成」と「あふれ出し」の相互的なプロセスである。

しかし、外部性は必ずしも簡単に内部に取り込まれうるとは限らない。外部性を取り込むためには、因果関係が確立され、リスクが計量可能にならなくてはならない。しかし、例えば狂牛病のケースのように、それは必ずしも容易ではない。何がどのようなリスクを引き起こすかを確定できない不確実な世界では、純粋な経済活動の枠組み作成は困難である。このような「あふれ出しがルールである」状況においては、利害の計算を可能にする枠組みは、テクノサイエンスや政治によって何が事実か確定され、どのような処置をとるべきかの決断がなされることによって、何とか作り出されていくのである。

したがって、市場の論理が貫徹されているように見える経済活動でも、枠組みはそこに与えられているのではなく、絶えざる積極的な枠組み作成の作業の結果である。この作業によってはじめて非経済的な関係性から解き放たれた純粋に経済的な活動というフィクションが生成、維持できるのである。

5.5 「枠組みとあふれ出し」論の利点

以上の議論によって、交換の社会的枠組みが「存在している」という点のみに注目してきた以前の議論が見落としていた三つの点について把握できるようになった。（1）枠組みは積極的に生み出されるものである。（2）枠組みは外的な関係に侵入される「もろい」ものである。（3）規範的な枠組みをそれでも維持しようとする運動がある。

枠組みの「もろさ」に注目することで、APPADURAI らによる商品交換と贈与の極端な二分法に対する批判をより明確に表現できるようになる。APPADURAI は、商品交換と贈与をするどく区別する必要はない、と主張している(APPADURAI 1984:13)。しかし、APPADURAI がじっさいに述べているのは、すべてのモノはある局面や文脈

において商品として取り扱われる可能性を持っているということであり、これはお金の決定論に対する BLOCH と PARRY の批判とパラレルな、商品の決定論に対する批判であるにすぎない。むしろ二分法批判の要点は、APPADURAI を引き取って内堀が展開している議論である (内堀 1997)。内堀によると、商品交換と贈与交換の区別はあくまでも理念的なものにとどまる。「人と人のあいだに成り立つすべての交換という相互行為には、一回完結(可能)性を義務的連鎖がそれぞれの構成比率を変えつつ混在しているのである」(内堀 1997:15)。

私たちが見てきた「枠組み生成」についての議論によって、「混在」が何を意味するのかを明確化できた。内堀の「混在」とは、WEBER の述べているような枠組みのもろさであり、CALLON の述べているような「あふれ出し」である。じっさいのやり取りでは、理念としての一回完結の取り引きの枠組みには、他の時間的、社会的な関係性が「あふれ出ている」。

しかし、CALLON の主張にしたがうなら、単に理念と現実の区別をするだけでは十分ではない。なぜなら、理念は自己実現をしようとするからである。市場の装置や「儀礼的技術」によって社会関係を排除しようとする努力が払われるし、CALLON の言うように経済学 (economics) が外的な諸要素を計算に取り込む理論を発展させることで経済 (economy) の自律性が作り出されていく。このイデオロギーの自己実現に向かう動きへの注目が、上記の議論の重要なもうひとつの点である。

6. 結論

したがって、更新された「枠組み理論」は次の三点に注目する。(1) 言語ゲームとしての交換の枠組みに注目する。(2) 枠組みがどのようにして作り出され、外的要素がどのようにして「あふれ出す」かに注目する。(3) 理念的枠組みを実現していこうとするプロセスに注目する。これによって、静態的な観点が見逃してきた枠組みの動態を把握できるだろう。

市場における交換のみならず、地域通貨のような新しい交換活動に対してもこの観点から取り組むことができる。筆者（中川 未発表）は、南フランスのある地域通貨アソシアシオンを枠組みの生成に注目して分析した。[5] そして、通貨を用いた贈与ではない交換のゲームでありながら、同時に商品交換のようには本気になってはならない、いわば「遊び」の枠組みを地域通貨が新しく作り出そうとしていることを明らかにした。[6] しかし同時に、この枠組みは不安定であり、つねに交換の枠組みが崩壊してしまう危険

にさらされている。つまり、地域通貨による交換はつねに「たんなる贈り物のやり取り」か、逆に「たんなる売り買い」に堕してしまう傾向を持っている。このような「あふれ出し」のリスクに対して、何とか枠組みを維持しようとするダイナミクスの存在を描き出した。

したがって、ここで検討してきたアプローチによって、いま変わりゆく世界においてあらわれつつある、さまざまな経済活動の特徴を理解できる可能性がある。そのためには、さらなる理論的検討とともに、新しい経済活動についてのいっそうの民族誌的取り組みが必要となるだろう。

注

1) 本稿の目的は可能性のあるアプローチの探求であるため、レヴューは全体にわたるものではなく、目的に関与していると筆者が判断する研究に限定せざるを得ない。より広範な検討は他の機会に譲り、ここでは、新たな民族誌的探求を可能にするアプローチはどのようなものであるのかを検討することに集中したい。
2) とりわけここでは交差イトコ間の関係が重要である。TORREN は、親族のヒエラルキー関係と交差イトコ間の平等関係の違いに注目して分析を行っている。しかし、ここでは議論を単純化しておく。
3) 労働者階級では妻が財布を握っていたと ZELIZER は指摘していている。
4) これは CALLON の表現である。
5) 地域通貨をひとことで言うと、一般に流通している通貨 (日本であれば円、フランスであれば現在はユーロ) ではなく、会員のあいだだけで通用する通貨（それが地域通貨とか仮想通貨とか呼ばれる) を媒介として、モノやサービスをやり取りする仕組み、である。このシステムはアングロサクソン系の国々でまず広まった。フランスでは SEL (Systeme d'Echange Local＝地域交換システム) の名で、１９９０年代後半に急速に広まった。現在ではフランス国内で３５０程度の SEL が存在しているとされている。
6) 事例分析（中川 未発表）では地域通貨の枠組みを BATESON の「遊びと空想の理論」を用いて分析し、地域通貨が BATESON の「遊び」に似た構造をもっていることを明らかにした（Cf. ベイトソン 2000(1972)）。

引用文献

APPADURAI, Arjun 1986 Introduction: commodities and the politics of values, in APPADURAI, Arjun (ed.), *The social life of things : Commodities in cultural perspective,* 64-91, Cambridge : Cambridge U.P.

BLOCH, Maurice and Jonathan PARRY 1989 Introduction: Money and the morality of exchange, in PARRY, Jonathan and Maurice BLOCH (ed.), *Money and the morality of exchange,* 1-

31, Cambridge:Cambridge U.P.

BOHANNAN, Paul 1959 The impact of money on an African subsistence economy, *The Journal of Economic History* 19(4), 491-503

BOURDIEU, Pierre 1997 *Méditations pascaliennes,* Paris:Le Seuil

CALLON, Michel 1998a Introduction: The embeddedness of economic market in economics, in CALLON, Michel (ed.) *The Laws of the Markets,* Oxford:BLACKWELL, 1-57

CALLON, Michel 1998b An essay on framing and overflowing: economic externalities revisited by sociology, in CALLON, Michel (ed.) *The Laws of the Markets,* Oxford:BLACKWELL, 244-269

GARCIA, Marie-France 1986 La construction sociale d'un marche parfait: le marche au cadran de Fontaine-en-Sologne, *Actes de la Rechereche en Sciences Sociales,* 65, 2-13

HOYLE, L.F. 1995 Standardization across non-standard domains: The case of organ procurements, *STHV,* 20(4)

KOPITOFF, Igor 1986 The cultural biography of things in APPADURAI, Arjun (ed.), *The social life of things : Commodities in cultural perspective,* 64-91, Cambridge:Cambridge U.P.

La PRADELLE, Michele de, 1996 Les vendredis de Carpentras: Faire son marche en Provence et ailleurs, Paris:Fayard

MILLER, Daniel 1995 Comsumption and Commodities, *Annual Review of Anthropology,* 24, 141-161

SIMMEL, Georg 1978(1900) *The philosophy of money,* translated by Tom BOTTOMORE and David FRISBY, London: Routledge & Kegan Paul

WEBER, Florence 2000 Transactions marchandes, échnanges rituels, relations personnelles: une ethnographie économique après le Grand Partage, Genèses, 41, 85-107

ZELIZER, Viviana A. 1989 The Social Meaning of Money: "special monies", *American Journal of Sociology* 95(2), 342-77

ZELIZER, Viviana A. 1994 The social meaning of money: Pin money, paycheck, poor relief, and other currencies, New York:Basic Books/Harper Collins Publisher

内堀基光 1997 「ものと人から成る世界」、『岩波講座文化人類学第 3 巻「もの」の人間世界』、1-22 頁、東京：岩波書店

ジンメル、ゲオルグ（居安正訳）1999(1900) 『貨幣の哲学（新訳版）』、東京：白水社

中川理 未発表 「新しい経済的リアリティをつくる：フランスのある地域通貨における交換の民族誌」

中川敏 1992 『交換の民族誌：あるいは犬好きのための人類学入門』、京都：世界思想社

中川敏 2004 「焼畑からマレーシアへ ： エンデ、三代のものがたり」、小泉潤二、栗本英世（編）『トランスナショナリティ研究：境界の生産性』、 25-52 頁、大阪：大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」

野元美佐 2004 「貨幣の意味を変える方法：カメルーン、バミケレのトンチン（頼母子講）に関する考察」、『文化人類学研究』、69(3)、353-372 頁

ブルデュ、ピエール（今村仁司、港道隆訳）1988 『実践感覚 1 』、東京：みすず書房

ベイトソン、グレゴリー （佐藤良明訳） 2000(1972) 『精神の生態学改訂第二版』、東京：新思索社

'Framework of Exchange' in Economic Anthropology

Osamu NAKAGAWA

In this paper I examine research done in the last two decades in anthropology and sociology on the phenomenon of exchange. I argue, that the most promising approach in this field is that which pays attention to frameworks of exchange and the ways they are constructed and sustained.

Until the 1980's, the commonsensical understanding of money that perceives money as determining social relationships prevailed in social sciences. This 'money determinism' approach was criticized in anthropology by Maurice Bloch and Jonathan Parry, and in sociology by Viviana Zelizer. Against the prevailing assumption that money corrupts all areas of life and 'monetarizes' social relationships, Bloch and Parry (eds. 1989) and Zelizer (1989, 1994) made a counter argument and demonstrated with empirical evidence that, in fact, social relationships determine the meaning of the money and not vise versa. They argued that in many societies (including the American) money acquired by impersonal economic activities in the outside world is treated and exchanged as gift as soon as it enters the inside sphere of more intimate relationships. Thus, it is possible to say that social framework determines the meaning of exchange.

These arguments brilliantly refute the commonsensical understanding of money, but have two weak points. Firstly, they take 'social framework' or 'context' for granted, offering as a result a too static view of the social reality of exchange. In fact, there is always ambiguity about the understanding of the context among the actors involved. Secondly, this approach lacks the concern for market transactions, because it concentrates mainly on the flow of money after it enters the inside sphere and does not try to explain how the framework of the outside sphere - market exchange - is constructed.

I argue that the way to overcome these defects is to be found in the works of Florence Weber and other French ethnographers and also in 'framing and overflowing' approach proposed by Michel Callon. Here the focus is on the 'mise en scene' of exchange, on the process of making social setting in which exchanges are made, whether in 'gifts' or 'market' frame. At the same time, this approach recognizes that any social framework is fragile and demands a continuous framing effort. I argue that this approach opens a possibility to describe the exchange as a dynamic and ever ongoing framing process.

I conclude this paper by demonstrating the usefullness of this approach in my research of French local currency (le Systeme d'Echange Local). The concept of 'framework of exchange' helps to gain insight into the exchanges made with French local currency and more fully describe the impact made on society by introduction of local currency.